

日本の漫画作品に描かれた考古学者 (2)

—1980年代—

櫻井 準也

Images of Archaeologist in Japanese Comics (2):

The 1980s

SAKURAI, Junya

Abstract

The archaeologist appeared in Japanese comics which are one of the contemporary popular cultures at many works. In the 1980s, the number of the works increased a little. And while the archaeologist had appeared in SF comics or occult comics at the first half, it becomes in the second half, an archaeologist came to appear in comics full of gags, action comics, adventure comics, etc. Moreover, the archaeologist character of the 1980s is not necessarily the middle-aged man, not wore the suit, and not the stereotyped Safari look. Some character similar to an actual archaeologist, some character is subject to the influence of the movie “Indiana Jones series”, and female archaeologist character has appeared. The image of archaeologist was diversified. Thus, the comics work of the 1980s in which archaeologist appeared, has a different tendency from the comics work of the 1970s.

要旨

現代のポピュラー・カルチャー（大衆文化）の一つであるわが国の漫画には、多くの作品に考古学者が登場してきた。その作品数は1980年代になると若干増加するが、その前半ではSF漫画やオカルト漫画に考古学者が登場していたのに対し、後半になるとギャグ漫画・アクション漫画・アドベンチャー漫画などに考古学者が登場するようになる。また、1980年代の考古学者キャラクターは必ずしも従来のような中年男性、スーツ姿、ステレオタイプ化したサファリ・ルックではない。実際の考古学者に近いキャラクターもあれば、映画「インディ・ジョーンズシリーズ」の影響を受けたキャラクターや女性考古学者が登場するなど、考古学者イメージが多様化している。

このように考古学者が登場する1980年代の漫画作品には1970年代とは異なる傾向がみられる。

キーワード

ポピュラー・カルチャー (Popular Culture)

漫画 (Japanese Comics)

1980年代 (The 1980s)

考古学者イメージ (Images of Archaeologists)

インディ・ジョーンズシリーズ (Indiana Jones Series)

女性考古学者 (Female Archaeologist)

はじめに

漫画は映画やアニメなどにも現代のわが国のポピュラー・カルチャー（大衆文化）を構成する重要な要素となっている（櫻井2014）。前回紹介したようにわが国の漫画作品で考古学者が登場する作品は早くも1950年代に出現している。その後1960年代までは考古学者が登場する作品数はそれほど多くなく、『鉄腕アトム』シリーズや『サイボーグ009』シリーズにみられるように手塚治虫や石ノ森章太郎といった漫画界の巨匠たちの作品が中心であった。また、1960年代では実写テレビドラマが漫画化された『ナショナル・キッド』の主人公が考古学者であり、『宇宙少年ソラン』では考古学者である古月博士が重要な役割を果たした。さらに1970年代になると考古学者が登場する作品数はやや増加する。引き続き手塚作品や石ノ森作品に考古学者が登場するが、手塚治虫の『三つ目がとおる』シリーズや諸星大二郎の『妖怪ハンター』シリーズのように当時のオカルトブームの影響がみられる作品が目立っている。また、初期の少女漫画作品に考古学者が登場している点も注目される。

このような1970年代までの状況に対し、

1980年代になると考古学者が登場する漫画作品に大きな変化がみられる。本稿では前回に引き続き筆者の管見に触れた1980年代の漫画作品を紹介しながら、考古学者が登場する漫画のジャンルや考古学者の描かれ方について考察を加えてみたい。

1. 1980年代の漫画作品に描かれた考古学者

ここでは1980年代に考古学者が登場する漫画作品を1980年代前半と後半に区分して紹介する。

まず、1980年代前半の作品では、1981（昭和56）年に『週刊少年キング』に掲載された手塚治虫の「さらばアーリィ」がある（手塚2003）。野人の娘アーリィとタクラマカン砂漠の発掘調査隊に物資を運搬するチェンが主人公で、考古学者のフー先生が登場する。フー先生は太った体型で禿げ頭、口髭を生やしており、人民服姿である。他の発掘調査隊の人物も人民服を着ており、彼が中国の発掘調査隊のリーダーであることがわかる。

次に、石ノ森章太郎作品では1960年代から継続するSF漫画『サイボーグ009』シリーズに考古学者が登場している。『サイボーグ009』シリーズの考古学者としては、1960年

代の「中東編」にドロイタ・モウ、1970年代の「神々との闘い編」に小松隆正が登場するが(櫻井2016)、1980年代では1980(昭和55)年に『週刊少年サンデー』に掲載された「ファラオ・ウイルス編」に考古学者が登場している(石ノ森2002)。この作品はエジプトのミイラの呪いをモチーフにしている。島村ジョー(サイボーグ009)とフランソワーズ(サイボーグ003)がギルモア博士とともに王家の谷を訪れるが、そこでギルモア博士はミイラを調査している医者ハーシェル博士と再会する。その後博士はミイラに付着していたファラオ・ウイルスが原因で急死するが、そのウイルスを入手してロンドンに散布し、特効薬を売ろうというN・B・G団の陰謀が発覚するという内容である。ここではハーシェル博士と同様にウイルス感染で急死した考古学者のバーゼル博士が登場するが、博士は眼鏡をかけ顎鬚を生やした中年男性でハーシェル博士と同じ白衣を着ている。

同様に1970年代から継続している作品では、主人公の考古学者稗田礼二郎が登場する諸星大二郎の『妖怪ハンター』シリーズがある。1980年代の作品として「海竜祭の夜」(1982)、「ヒトニグサ」(1982)、「花咲爺論序説」(1985)、「幻の木」(1987)、「川上より来たりて」(1988)があげられるが(諸星2005)、このうち1985(昭和60)年に『週刊少年ジャンプ』に掲載された「花咲爺論序説」は花咲爺伝説と縄文農耕や環状列石との関連を題材にした興味深い作品である。稗田礼二郎は細身で肩までかかる長髪、黒いスーツとネクタイ姿であり、考古学者というより民俗学者や宗

教学者のイメージが強いが、「花咲爺論序説」の冒頭の部分で稗田は黒いスーツの上着とネクタイを取った姿で発掘調査を行っている。

さらに、オカルト漫画で主人公が考古学者の作品として、1983~86(昭和58~61)年に『週刊少年チャンピオン』に掲載された芝田英行^(註1)の『闇の密霊師』シリーズがある(芝田1985・86)。主人公の鷲羽涼は早稲田大学第一文学部考古学資料室で発掘資料の整理作業を行いながら、雑誌『古代』に論文を執筆をする研究者である。動物考古学が専攻であるが呪術を使って妖怪を退治する霊能者という設定である。鷲羽は若い男性で長髪にサングラスをかけ、貫頭衣のようなものを着ている。他にも助手の伊沢、エジプト調査団調査主任の田原や調査員の河野(「マンドラゴラ」)、エジプト調査団の吉川信一(「メムノンの涙」)などの考古学者が登場する。田原は口髭を生やした白衣にネクタイの男性、河野は長髪の若い女性、吉川は長髪で口髭を生やした作業着姿の男性である。

その後、1980年代後半になると考古学者が登場する漫画をめぐる状況に変化がみられる。その一つは新たなSF漫画の登場である。例えば、伝奇SF漫画作品として1986~1990(昭和61~平成2)年に『コミックトム』に掲載された作品が星野之宣の『ヤマタイカ』である(星野1987~1991)^(註2)。本作品は古代日本の火の民族に関する壮大な物語であり、火焰土器・銅鐸・遮光器土偶・装飾古墳など様々な場面で遺物や遺跡が登場する。主人公はアマチュア古代史家の熱雷草作であるが、考古学者として西南大学考古学の教授と助手

(註1) 芝田英行氏は1982(昭和57)年に早稲田大学大学院(考古学)修了し、1983(昭和58)年漫画家として活動を開始、1994(平成6)年に漫画家活動を停止して埋蔵文化財調査活動を再開している。現在はフリーランスの埋蔵文化財調査員(専門は動物考古学)である。

(註2) 『ヤマタイカ』の母体となった作品が1983(昭和58)年に『週刊ヤングジャンプ』に掲載された『ヤマトの火』(星野1984)である。

の鳥伊都子が登場し、阿蘇の中岳で巨大銅鐸の鋳型を発掘する。教授は眼鏡をかけ、発掘調査では作業服に帽子、首にタオルを巻いており、伊都子はTシャツにつなぎの作業服姿である。

さらに、1988（昭和63）年に『SFマガジン』に掲載された、とり・みきの『山の音』（とり・みき2005）も興味深い作品である。主人公狩野忠の恋人である伏田英理がT大学人類学教室の学生、その祖父の伏田英一が元T大学人類学教室教授である。他にT大学人類学教室の山下、自衛大学の人類学者の今川も登場する。伏田英理の失踪から戦時中に行方不明になった北京原人やメガントロプスの骨、さらに巨人族へと話が展開する興味深い作品であるが、登場人物はどちらかといえば人類学者である。伏田英一（戦時中）は短髪に口髭でスーツ姿に帽子姿、山下は作業着姿で眼鏡をかけた体格のいい青年、今川は痩せた体型で眼鏡をかけ、開襟シャツを着た中年男性である。

また、この時期に考古学者が登場する漫画作品のジャンルが広がったことも大きな変化である。例えばギャグ漫画では1986（昭和61）年に『週刊少年ジャンプ』に掲載された秋本 治の『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の「黄金の鯨伝説!!の巻」がある（秋元1988）。本作では主人公の両津勘吉が「下町の探検家インディ・両津」と称しているように明らかに映画『インディ・ジョーンズ』シリーズの影響を受けている。ここで登場する考古学者は考古学博士のドクター姫路であるが、彼は幻城の黄金の鯨を狙うトレジャーハンターであり、禿げ頭に口髭、眼鏡をかけた着物姿の男性である。

さらにアクション漫画では1988～89（昭和63～平成元）年に『コミックNORA』に掲載された岡崎武士の『エクスプローラーウーマ

ン・レイ』（岡崎1989）がある。主人公の考古学者杵築麗奈は大学教授であるがアクション系の女性であり、失踪した考古学者で冒険家の祖父杵築太平洋教授の日記に残された謎を追って世界の遺跡を駆け巡るというストーリーである。この他にも杵築太平洋教授の助手ロバート・A・ランバートや麗奈がギリシャのアテネで再会したマッコール教授が登場する。麗奈は長髪で細身の体型であり、遺跡では作業着やレオタード姿であるが、大学ではスカート姿の女性らしい服装である。これに対し、杵築太平洋教授は小柄で禿げ頭、口髭の人物で作業着のような不思議なコートに帽子、肩掛けバック姿である。助手のロバートは白人の好青年であるが調査では太平洋教授と同じ服装、マッコール教授は禿げ頭でワイシャツにネクタイ姿である。また、同じアクション漫画で1989（平成元）年から『週刊少年サンデー』に連載された、たかしげ宙（作）・皆川亮二（画）の『スプリガン』（たかしげ・皆川1991～96）がある。主人公の御神苗優は考古学者ではないがスプリガン、すなわち超古代文明を封印することを目的とする組織の特殊工作員である。20世紀末に不思議な力を持っている超古代の遺跡の争奪戦に大国が介入したため、それを守ることが彼の任務である。御神苗は革ジャン姿の青年であるが、戦闘時にはA・Mスーツ（アーマードマッスルスーツ）を着ている。

次に、アドベンチャー漫画として1987（昭和62）年に『週刊少年ジャンプ』、2005（平成17）年より『ウルトラジャンプ』に連載中の荒木飛呂彦の『ジョジョの奇妙な冒険』（荒木1987～2004）がある。主人公のジョナサン・ジョースター（ジョジョ）は考古学者ではないが大学で考古学を専攻していたという人物である。Part1の「ファントムブラッド」は19世紀末のイギリスが舞台で、アステ

カの石仮面や生贄の儀式が登場し、主人公の青年貴族ジョナサン・ジョースターと下層階級出身のディオ・ブランドーの抗争劇が描かれている。

このように、1980年代後半にはアクション漫画やアドベンチャー漫画に考古学者が登場するようになるが、この時期の作品の中でも特筆される作品としてあげられるのが、1988～94(昭和63～平成6)年に『ビックコミックオリジナル』に掲載された浦沢直樹の『MASTERキートン』(勝鹿・浦沢1989～93)であろう^(註3)。主人公の平賀=キートン・太一はオックスフォード大学卒の考古学者で胡桃沢大学非常勤講師、大手保険会社ロイズのオプ(調査員)という肩書であるが、元SAS(イギリス特殊空挺部隊)のサバイバル教官(マスター)という異色の経歴の持ち主である。キートンの父親は日本人、母親はイギリス人で離婚歴があり、百合子という一人娘がいる^(註4)。体型は細身で顔つきは特に美形ではなく前髪の一部を垂らしているのが特徴で、服装は上下揃いのスーツにネクタイ姿である。1980年代の作品ではキートン以外の考古学者として、「黒と白の熱砂」と「砂漠のカーリマン」で中国の新疆ウイグル自治区で発掘調査を行っている高倉教授、山本助教授、オックスフォード大学のコリンズ教授、

ハーニー準教授が登場する。このうち高倉教授はやや大柄で細身、眼鏡をかけた終始強気の老人、やや若い山本助教授はやや丸顔で天然パーマの髪の温和人物である。また、オックスフォード大学のコリンズ教授は大柄で細身、口髭を生やした老人、ハーニー準教授はやや小柄で小太り、丸顔で頭が禿げかかった男性である。四人ともサファリ・ルックであるが、帽子はコリンズ教授のみ罌付きの帽子であり、その他の3名は布製で折り畳みが可能なサファリハットである。また、「屋根の下の巴里」では、キートンの恩師であるオックスフォード大学のユーリー・スコット教授が登場するが、教授は小柄の痩せた体型で眼鏡をかけ、スーツとネクタイ姿の温和そうな老人である。

これに対し、少女漫画では1970年代に連載が始まった『王家の紋章』(細川1996)のように1980年代にも考古学者が登場する作品が複数ある。その一つが高階良子の一連の作品で1980(昭和55)年に『ポニータ プリンセス』に掲載された「幻のビルカバンバ」、1981(昭和56)年に『プリンセスゴールド』に掲載された「セーアカトルの日」、1987(昭和62)年に『プリンセス』に掲載された「インカ幻帝国」がある(高階2010)。このうち、「幻のビルカバンバ」と「インカ幻帝国」

(註3) このうち1989(平成元)年の作品は次の通りである(勝鹿・浦沢1989)。**[MASTERキートン]**発掘: 1-砂漠のカーリマン(迷宮の男、天使のような悪魔、小さなブルーレディー、ダビデの小石、黒と白の熱砂、砂漠のカーリマン、背中の裏街、遙かなるサマーブディング)、**[MASTERキートン]**発掘: 2-狩人の季節(貴婦人との旅、狩人の季節、獲物の季節、収穫の季節、FIRE & ICE、薔薇色の人生、RED MOON、SILVER MOON)、**[MASTERキートン]**発掘: 3-アレクセイエフからの伝言(屋根の下の巴里、小さな巨人、レーザーニエ奇譚、アレクセイエフからの伝言、すべての人に花束を、黒い森、昼下がりの大冒険、赤の女)。また、1989～93(平成元～5)年に『ビックコミックオリジナル増刊号』に掲載された様々な動物にスポットを当てた短編をまとめた『キートン動物記』(勝鹿・浦沢1995)も出版されている。なお、キートンの父親は動物学者である。

(註4) 2012年には長崎尚志(作)・浦沢直樹(画)による続編『MASTERキートン REマスター』が『ビックコミック』に掲載されたが(長崎・浦沢2012)、ここでは娘の百合子が考古学者となり大学で講師を務めている。

は、主人公である和子がインカ帝国にタイムスリップする物語であるが、ここでは和子の伯父で考古学者の大橋教授が登場する。大橋教授はインカ帝国が専門で、細身で眼鏡をかけ顎鬚を生やした中年男性であり、自宅ではボロシャツ、調査地のペルーでは作業服やジャケットを着ている。また、「セーアカトルの日」はマヤ文明の物語であり、主人公で高校生の富山篝の両親が考古学者である。両親ともマヤ文明が専門の考古学者で現地の遺跡調査の際に事故で亡くなっているが、サファリ・ルックのような服装である。さらに、1988（昭和63）年に『LaLa』に掲載された森川久美の『イスタンブル物語』（森川1989）は、1921年に主人公でケンブリッジ大学卒の考古学者ルパート・ウィリアムスが遺跡調査のためにイスタンブルに到着したところから物語が始まる。ルパートはやや長髪で眼鏡をかけたスーツにネクタイ姿の青年である（本人は考古学者ではなく歴史学者と称している）。

さらに、少女漫画では、実在の人物であり映画『アラビアのロレンス』（1963年公開）で著名な考古学者トーマス・エドワード・ロレンス^(註5)の生涯を描いた神坂智子の『T. E. ロレンス』（神坂1985～88）が1984～88（昭和59～63）年に『Wings』に掲載されている。この作品では映画作品とは異なり、ロレンスの生い立ちから亡くなるまでを描いた伝記漫画であり、中東での発掘調査の様子も詳細に描かれている。また、ロレンスは長身で美形の白人男性に描かれており、学生時代はスーツにネクタイ、発掘調査では軍服姿である。またロレンス以外にも考古学者としてロレンスの恩師のホーガス博士（オックスフ

ォード大学）とウーリー博士が登場するが、ホーガス博士は眼鏡をかけ長い白鬚を生やした人物、ウーリー博士は口鬚を生やした人物である。服装は二人とも大学ではスーツ姿、発掘現場では軍服姿である。

このように考古学者が登場する1980年代の漫画作品は、その前半には漫画界の巨匠の作品やオカルト漫画など基本的に1970年代の傾向を受け継いでいるが、1980年代後半になると新たな漫画のジャンルに広がっていることがわかる。また、少女漫画でも1970年代に引き続き複数の作品に考古学者が登場している。

2. 1980年代のわが国の考古学界の動向

1980年代は、その後半がバブル期にあたるため好景気に支えられて土地の開発が急増し、それに伴って発掘調査の件数が急増した時期にあたる。わが国の一年間の発掘調査件数は1980年代のはじめに3000～4000件程度であったが、その後徐々に増加して1980年代末には8000件を越え、それに伴って発掘調査等に従事する埋蔵文化財職員の数も急増している。こうして、全国的に発掘調査件数が増加した結果、遺跡の周辺に住む人々が発掘作業員として遺跡発掘に参加する機会が増えるなど、研究者や考古学愛好家だけでなく一般の人々にとっても遺跡や発掘調査が身近な存在となった。

また、発掘調査によって多くの成果が得られている。1983（昭和58）年に奈良県キトラ古墳において石室内部をファイバースコープで撮影して話題となり、1984（昭和59）年に

(註5) ロレンスは1888年イギリス生まれ。オックスフォード大学に入学し、ホーガス博士と出会い考古学や歴史学に興味を持つ。大学卒業後、大英博物館のシリア調査やエジプトなどの発掘調査に参加し、第一次世界大戦中にカイロ陸軍情報部、外務省アラブ局、大戦後は植民省や空軍に所属している。

は鳥根県荒神谷遺跡(弥生時代)で多量の青銅器が発見され、1985(昭和60)年には群馬県黒井峰遺跡で噴火によって埋没した古墳時代の集落が発見された。1986(昭和61)年にはわが国を代表する弥生時代の遺跡である佐賀県吉野ヶ里遺跡の発掘調査が開始され三年後に遺跡保存が決定されている(吉野ヶ里遺跡は邪馬台国の姿をイメージでさせる遺跡として一大ブームを引き起こした)。さらに1988(昭和63)年には奈良県で長屋王の邸宅や豪華な副葬品を伴う藤ノ木古墳が発掘され全国的に話題となった。また、毎年前年度に調査された全国の遺跡の中で特に注目される遺跡の調査成果を公表する場となっている文化庁主催の『日本列島発掘展』が開催されるようになったもこの年である。

このように、1980年代は全国的な遺跡発掘調査件数の増加に伴って重要な遺跡が次々と発見・調査された時期であった。その結果、連日のように遺跡の発見や発掘調査の成果が新聞やテレビで報道されるようになり、遺跡や埋蔵文化財の存在が周知されるようになった。

3. 1980年代の漫画作品に描かれた考古学者

遺跡や考古学が日本人にとって身近な存在となった1980年代において考古学者が登場する漫画作品は1970年代と比較して若干増加しているが、これはわが国の映画作品やアニメ作品においてもみられる傾向である(櫻井2014)。

ただし、1980年代前半と後半でその様相は異なる。このうち、1980年代前半は1970年代の流れを受け継いでいる。1970年代には手塚治虫作品や石ノ森章太郎作品のような漫画界の巨匠の作品に考古学者が登場し、SF漫画やオカルトブームの影響によるオカルト漫画

が特徴的であったが(櫻井2016)、この傾向は1980年代前半に継承されている。具合的には、手塚治虫の「さらばアーリィ」(手塚2003)にフー先生、SF漫画『サイボーグ009』シリーズの「ファラオ・ウイルス編」(石ノ森2002)にバーゼル博士、『妖怪ハンター』シリーズ(諸星2005)に稗田礼二郎、『闇の密霊師』(芝田1985・86)に鷺羽涼が考古学者として登場している。このうち、SF漫画『サイボーグ009』シリーズの「ファラオ・ウイルス編」(石ノ森2002)はエジプトのファラオのミイラに付着していた未知のウイルスを散布して特効薬を販売しようとしたN・B・G団の陰謀が発覚するという内容であるが、その背景にあるのが「ミイラの呪い」であり、1922年の発見直後から世界中で話題となり、多くの映画やドラマで取り上げられた「ツタンカーメン王の呪い」がモチーフとなっている。また、考古学者の稗田礼二郎が登場する『妖怪ハンター』シリーズ(諸星2005)では、1970年代に引き続き1980年代にも多くの作品が発表されているが、中でも花咲翁伝説と縄文農耕を結び付けた「花咲翁論序説」は興味深い作品である。また、『闇の密霊師』シリーズ(芝田1985・86)は主人公の鷺羽涼が呪術を使って妖怪を退治するオカルト漫画であるが、主人公と同様に作者自身が考古学者であるという点で特筆すべき作品である。

これに対して、1980年代後半になると様々なタイプの漫画に考古学者が登場するようになり、描かれる考古学者像も多様化してくる。このうち、ギャグ漫画の『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の「黄金の鯨伝説!!の巻」(秋元1988)には考古学者のドクター姫路が登場するが、この作品は明らかに1980年代に大ヒットした映画『インディ・ジョーンズ』シリーズの影響を受けており、ドクター

姫路は考古学者というよりトレジャーハンターである。

また、アクション漫画の『エクスプローラーウーマン・レイ』（岡崎1989）の主人公が考古学者の杵築麗奈である。祖父の杵築太平洋も考古学者で冒険家であり、他にもロバート・A・ランバートやマッコール教授が登場する。この作品にも映画『インディ・ジョーズ』シリーズの影響がみられるが、1980年代末という時期に主人公が女性考古学者でアクション系であるという点では、テレビドラマの『レリック・ハンター』シリーズ（2000・2002年放映）や映画『トゥームレイダー』シリーズ（2001・2002年公開）を彷彿とさせるが、この作品はそれらの作品より10年以上前の作品であり、その意味で先駆的な漫画作品であるといえる。また、同じくアクション漫画では『スプリガン』（たかしげ・皆川1991～96）の主人公御神苗優がスプリガン（超古代文明を封印することを目的とする組織の特殊工作員）という設定であり、従来の遺跡や考古学者が登場する漫画作品とは異なる新たな設定やストーリーが展開されている。

これに対し、従来から遺跡や考古学と親和性が高かったSF漫画作品では、まず伝奇SF漫画作品と称される『ヤマタイカ』があげられる（星野1987～1991）。ここでは主人公のアマチュア古代史家熱雷草作の他に考古学者として西南大学考古学の教授と助手の島伊都子が登場する。古代日本の火の民族に関する物語であるが、火焰土器・銅鐸・遮光器土偶・装飾古墳などが登場し、遺跡や遺物の分布図などを示しながら邪馬台国の所在地や神武東征にも言及した大作である。さらに、『山の音』（とり・みき2005）もSF漫画作品として注目される作品である。この作品は人類学教室が舞台であるが、行方不明になった

北京原人の人骨が登場し、メガントロプスの骨と古くから伝説となっている巨人族が関連づけられている興味深い作品である。

そして、1980年代末から90年代前半を代表する考古学系の漫画作品が『MASTER キートン』（勝鹿・浦沢1989～93）である。主人公の平賀＝キートン・太一は一見、さえない中年男性であるが、オックスフォード大学卒でロイズのオプ（調査員）、元SAS（イギリス特殊空挺部隊）のサバイバル教官（マスター）という異色の経歴の持ち主である。大学教員の妻との離婚歴があり、非常勤先の大学では変人扱いされているが有能な考古学者であり、自らの経歴を生かして事件を解決するという設定はいかにも日本人好みである。なお、この作品はわが国の30代から40代の考古学研究者にファンが多く、彼らが考古学を志す契機となった漫画作品の一つである。

また、1970年代に引き続き1980年代の少女漫画にも考古学者が登場している。高階良子の一連の作品（高階2010）や森川久美の『イスタンブル物語』（森川1989）である。遺跡が登場する少女漫画作品には、エキゾチックな古代文明の魅力が描かれているが、『王家の紋章』（細川1996）のように過去へタイムスリップする展開はこうした少女漫画の特徴の一つである。また、1980年代には実在の考古学者トーマス・エドワード・ロレンスの生涯を描いた『T.E. ロレンス』（神坂1985～88）も発表され、ロレンスの生涯が丹念に描かれている。

次に、1980年代の漫画作品に登場する考古学者像について検討してみたい。まず、1950～70年代の漫画作品において考古学者はその多くが太った体型で禿げ頭、眼鏡をかけた中年男性のイメージで描かれている。服装は当時の学者イメージと重なるスーツ姿が多いが、発掘現場や野外では作業着姿やサファ

リ・ルックである(櫻井2016)。しかし、これらの考古学者イメージと異なるのが、『妖怪ハンター』シリーズの稗田礼二郎であり、稗田は細身で肩までかかる長髪、黒いスーツとネクタイ姿の男性であり、考古学者というよりは民俗学者や宗教学者のイメージである。

これに対し、1980年代の漫画作品では、手塚治虫の「さらばアーリィ」(手塚2003)のフー先生は太った体型で禿げ頭、口髭を生やした人民服姿、『サイボーグ009』シリーズの「ファラオ・ウイルス編」(石ノ森2002)のパーゼル博士は眼鏡をかけ顎鬚を生やした中年男性でともに1970年代の考古学者イメージと変わらない。これと異なるのが長髪でスーツ姿の『妖怪ハンター』シリーズの稗田礼二郎であるが、稗田は「花咲爺論序説」の発掘調査の場面では黒いスーツの上着とネクタイを取った姿で発掘調査を行っている。さらに、『闇の密霊師』シリーズ(芝田1985・86)の鷺羽涼は若い男性で長髪にサングラスをかけ、貫頭衣のような不思議な服装をしている。他の考古学者ではエジプト調査団の田原は口髭を生やした白衣にネクタイの男性、河野は長髪の若い女性、吉川は長髪に口髭で作業着姿の男性であるが、作者の芝田自身が考古学者であることもあり、当時実際に発掘調査に従事していた学生や考古学者のイメージに近い^(註6)。

その後1980年代後半になると考古学者が登場する漫画作品のジャンルが広がるが、その結果考古学者の描かれ方はそれまでのステレオタイプ化された考古学者ではなく、実際の考古学者に近いキャラクターと実際の考古学者とかけ離れたキャラクターの考古学者が存在する。例えば、前者の例として『ヤマタイ

カ』(星野1987~1991)に大学教授と助手の烏伊都子が登場するが、教授は眼鏡をかけた中年の男性で発掘調査では作業服に帽子、首にタオルを巻いた姿で考古学者として違和感がない。また、『山の音』(とり・みき2005)の場合は考古学者というより人類学者であるが、伏田英一(戦時中)が短髪に口髭でスーツ姿に帽子、山下が作業着姿で眼鏡をかけた青年、今川は痩せて眼鏡をかけ、開襟シャツを着た中年男性であり、こちらも違和感はない。

しかし、『MASTERキートン』(勝鹿・浦沢1989~93)の主人公キートンは細身の体型で保険会社のオプ(調査員)の仕事もあるため上下揃いのスーツにネクタイ姿であり、一般的な考古学者のイメージとは異なる。その一方で、「屋根の下の巴里」のキートンの恩師ユーリー・スコット教授は痩せた体型で眼鏡をかけ、スーツとネクタイ姿、「黒と白の熱砂」と「砂漠のカーリマン」の高倉教授は細身で眼鏡をかけた老人、山本助教授はやや丸顔で天然パーマの髪の温和そうな人物、コリンズ教授は大柄で細身、口髭を生やした老人、ハーニー準教授は小太りで丸顔、頭は禿げかかっており、服装は四人ともサファリ・ルックである。これらの人物は実際の考古学者のイメージに近い。

これに対して、1980年代後半に考古学者が登場する新たなジャンルであるギャグ漫画やアクション漫画では、実際の考古学者とかけ離れたキャラクターが多い。例えば、ギャグ漫画の『こちら葛飾区亀有公園前派出所』(秋元1988)のドクター姫路は禿げ頭に口髭、眼鏡をかけた男性で着物姿である。また、アクション漫画では『エクスプローラーウーマ

(註6) このうち、エジプト調査団関係者の男性は口髭を生やしているが、中東では髭を生やしていない男性は一人前の男性とはみられず発掘調査にも支障をきたすため、髭を生やしている。これに対し、国内が専門の研究者は埋蔵文化財行政に携わる公務員が多いこともあり、髭を生やしている人は少ない。

ン・レイ』(岡崎1989)の主人公杵築麗奈は長髪で細身の体型であり大学ではスカート姿の女性らしい服装であるが、遺跡では作業着やレオタード姿で闘う考古学者である。また、祖父の杵築太平洋教授は禿げ頭に口髭の人物で作業着のような不思議なコートに帽子、肩掛けバック姿であり、助手のロバートも同じ服装である。さらに、同じアクション漫画の『スプリガン』(たかしげ・皆川1991～96)の主人公である御神苗優はスプリガンであり考古学者ではないが、普段は革ジャン姿の青年で戦闘時にはA・Mスーツを着ており、いかにもアクション漫画のキャラクターである。

また、少女漫画では主人公の若い考古学者が美形に描かれていることが特徴の一つである。具体的には、森川久美の『イスタンブル物語』(森川1989)の主人公ルパートはスーツにネクタイ姿でやや長髪、眼鏡をかけた美形の青年であり、神坂智子の『T. E. ロレンス』(神坂1985～88)の主人公ロレンスも長身で美形の男性でオックスフォード大学時代はスーツにネクタイ姿、発掘調査では当時の時代背景を反映して軍服姿である。また、ホーガス博士は眼鏡をかけ長い白髭をは生やした人物、ウーリー博士は口髭をは生やした人物であり、二人とも大学ではスーツ姿、発掘現場では軍服姿である。これに対して、高階良子の「幻のビルカバンバ」および「インカ幻帝国」(高階2010)の大橋教授は細身で眼鏡をかけ顎鬚を生やした中年男性であり、自宅ではポロシャツ、調査地のペルーでは作業服やジャケットを着ている。このように少女漫画では主人公以外の考古学者は実際の考古学者イメージに近いことがわかる。

4. まとめ

考古学者が登場する1980年代の漫画作品は、その前半は基本的に1970年代までの作品の流れを継承するものであり、手塚治虫や石ノ森章太郎の作品、あるいは1970年代のオカルトブームの影響が想定できる『妖怪ハンター』シリーズなどのオカルト漫画作品が中心である。しかしながら1980年代の後半になると、新たにギャグ漫画、アクション漫画、アドベンチャー漫画などに考古学者が登場するようになり、ジャンルの幅が広がった。これに対して、少女漫画は1970年代の流れを受け継ぎながらその独特なストーリー展開や人物の描き方がみられる作品に考古学者が登場している。

考古学者の身体的特徴や服装については、1970年代までのわが国の漫画作品に登場する考古学者は太った体型で禿げ頭、眼鏡をかけたスーツ姿の中年男性という学者イメージであり、発掘調査などでは作業着やサファリ・ルックで登場することが多かったが(櫻井2016)、この傾向は1980年代になっても認められる。しかし、そのストーリーや人物描写が緻密になったことに伴って、1980年代になるとより現実に近い考古学者の姿が描かれるようになってきている。その一方で1980年代後半にはアクション漫画やアドベンチャー漫画に考古学者が登場することによって新たなタイプの考古学者が出現している。そこでは遺跡や遺物の謎やミステリーが強調されるとともにアドベンチャー的要素が強くなった結果、現実の考古学者と遊離した考古学者が登場するようになっている。この背景には映画『インディ・ジョーンズ』シリーズの影響が想定される。また、『MASTER キートン』のように現在の日本の考古学研究者に影響を与

えた作品や『エクスプローラーウーマン・レイ』のように女性考古学者が主人公の作品が登場するようになったことも1980年代の漫画作品を語るうえで見逃せない傾向である。このように、1980年代は考古学者が登場する漫画作品やそこに描かれた考古学者像が多様化した時期であるといえる。

引用・参考文献

- 秋本 治「黄金の鯨伝説!!の巻」『こちら葛飾区亀有公園前派出所』第52巻、集英社、1988年（初出『週刊少年ジャンプ』1986年43・44号）
- 荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』集英社、1987～2004年（初出『週刊少年ジャンプ』1987年1・2号～2004年47号、『ウルトラジャンプ』2005年4月号～連載中）
- 石ノ森章太郎『サイボーグ009 ファラオ・ウィルス編』メディアファクトリー、2002年（初出『週刊少年サンデー』1980年16～18号）
- 岡崎武士『エクスプローラーウーマン・レイ』学習研究社、1989年（初出『コミックNORA』1988年1～12月号、1989年1～10月号）
- 勝鹿北星（作）・浦沢直樹（画）『MASTERキートン』小学館、1989～93年（初出『ビックコミックオリジナル』1988年6月5日号～1994年6月5日号）
- 勝鹿北星（作）・浦沢直樹（画）『キートン動物記』小学館、1995年（初出『ビックコミックオリジナル』増刊号、1989年7月号～1993年10月号）
- 神坂智子『T.E.ロレンス』新書館ウイングスコミックス、1985～88年（初出『Wings』1984年11・12月号、1985年1～4月、6～11月号、1986年1～12月号、1987年1～12月号、1988年1～8月号）
- 櫻井準也『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社、2014年
- 櫻井準也「遺跡調査の社会学—漫画と考古学—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第26号、2015年
- 櫻井準也「日本の漫画作品に描かれた考古学者(1)—1950～70年代—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第28号、2016年
- 芝田英行『闇の密霊師』秋田書店、1985年（初出『週刊少年チャンピオン』1983年46～48号、1984年10～12、33～37号、1985年8～20号）
- 芝田英行『闇の密霊師外伝 光の霊記』秋田書店、1986年（初出『週刊少年チャンピオン』1985年50・51号、1986年17・20・21・25～27号）
- 芝田英行「新・闇の密霊師」『週刊少年チャンピオン』1995年9号
- 芝田英行「真・闇の密霊師」『週刊少年チャンピオン』1995年44号、1996年12号
- たかしげ宙（作）・皆川亮二（画）『スプリガン』小学館、1991～96年（初出『週刊少年サンデー』1989年41号～96年2月増刊号）
- 高階良子「幻のビルカバンバ」『インカ幻帝国』秋田書店、2010年（初出『ポニータ プリンセス夏の増刊号』1980年）
- 高階良子「セアカトルの日」『インカ幻帝国』秋田書店、2010年（初出『プリンセスワールド』1981年7月号）
- 高階良子「インカ幻帝国」『インカ幻帝国』秋田書店、2010年（初出『プリンセス』1987年9～11月号）
- とり・みき『山の音』チクマ秀版社、2005年（初出『SFマガジン』1988年1～8月号）
- 手塚治虫『手塚治虫恐怖短編集7 千年の孤独編』講談社漫画文庫、2003年（初出『週刊少年サンデー』1981年1月19日号）
- 長崎尚志（作）・浦沢直樹（画）『MASTERキートン REマスター』小学館、2014年（初出『ビックコミックオリジナル』2012年7号～2014年17号）
- 星野之宣『ヤマトの火』集英社、1984年（初出『週刊ヤングジャンプ』1983年月38～51号）
- 星野之宣『ヤマトイカ1～6』潮出版社、1987～1991年（初出『コミックトム』1986年1月号～1991年4月号）
- 細川智栄子『王家の紋章』秋田文庫、1996年（初出『月刊プリンセス』1976年10月号～連載中）
- 森川久美『イスタンブル物語』角川書店、1989年（初出『LaLa』1988年8～12月号）
- 森本和男『遺跡と発掘の社会史』彩流社、2001年
- 諸星大二郎「海竜祭の夜」『妖怪ハンター 地の巻』集英社文庫、2005年（初出『週刊ヤ

ングジャンプ』1982年9号)
諸星大二郎「ヒトニグサ」『妖怪ハンター 地の
巻』集英社文庫、2005年（初出『週刊ヤ
ングジャンプ』1982年39号）
諸星大二郎「花咲翁論序説」『妖怪ハンター天の
巻』集英社文庫、2005年（初出『週刊ヤ
ングジャンプ』1985年39号）
諸星大二郎「幻の木」『妖怪ハンター 天の巻』

集英社文庫、2005年（初出『ヤングジャ
ンプグレート青春号』vol.6、1987年）
諸星大二郎「川上より来たりて」『妖怪ハンター
天の巻』集英社文庫、2005年（初出『月
刊ベアーズクラブ』1988年7月号）
若狭 徹「だれのための考古学か 考古学と現代
社会」『はじめて学ぶ考古学』有斐閣、
2011年